

溝口雄三氏インタビュー（2007年4月28日、於東京大学駒場キャンパス）

溝口雄三（東京大学名誉教授）

村田雄二郎（東京大学教授）

伊東貴之（武蔵大学教授）

川尻文彦（帝塚山学院大学准教授）

大澤肇（東京大学院生）

● 生い立ち、大学入学から教養課程時代

溝口雄三：僕は1932年の生まれです、私どもの世代は小学校時代に日中戦争を経験している世代で、僕の中には幼児体験として、日本の兵隊が中国人を殺そうとしている一枚の写真を見た記憶が、今も頭の中に残っています。ただ不思議なことに、その記憶は大学に入った時に、二十年ぶりに突然甦ったもので、それまで、ずーっと長い間消えたままだった、大学に入って、中国研究会の部屋に入寮して、そこで中国問題にナマにぶつかって、岩波書店から出ていた『日本資本主義講座』というシリーズで、アジア諸地域や中国での日本軍の残虐行為や抗日戦争の実態に触れ、自分がバラバラに解体されるような衝撃を受けました。そのときに、突然その二十年前の思い出が蘇ってきたのです。僕はこの「記憶」が甦生する時の装置に非常にこだわっています。記憶とはイデオロギーを回路にして成り立つものか、とかね。

伊東貴之：ニュース映像ではなくて、私的な映像ですか？

溝口：そうです。セピア色の小さな写真ですが、非常に鮮明な記憶です。一人の農民らしい男が、後ろ手に縛られ、目隠しをされて跪いている後に、日本兵が軍刀をかざして今にも首をはねようとしているのを、何人かの日本兵が取り巻いて立って見ている、という場面です。それは私の母方の叔父が中国戦線に駆り出されて帰還したときに親族の者に見せてくれたものだったろうと思います。その養子で働き者だった叔父は、帰還後二年もしないうちに病気で亡くなりました。

この写真の記憶は僕の人生の原点にあるものだと、今は思っています。吉田松陰が、黙霖という勤王方の僧から脱藩を勧められた時の返事に、自分はどうしても脱藩は出来ない、「我に罪あり」と書き送っています。自分の先祖筋にあたる大江匡房が鎌倉幕府の開府に参与し、以来その幕府体制のなかで自分は三百年禄を食んできた、ということにこだわっていたわけです。この「我に罪あり」という言葉はそのとき非常に印象に残りましてね。ああ、何か自分にもそういうこと言えるなあ、と。

ですから、僕が中国研究のその後のなかで、「主体」の問題に非常にこだわるのは、そこにあるのだろうか、と。自分では自分をそう理解しているのですがね。ただ誤解のない

ように申し上げますが、僕は自分に中国侵略に関わった戦争責任があるとか、中国侵略を謝罪する立場を研究の立場とすべきだなどと言いたいわけではありません。研究に短絡的に政治的な動機や目的をもちこむことには、反対です。ただ、生き方の自覚の問題として「原点」だというだけです。

村田：駒場寮の中国研究会というのは、まさに中国革命の影響を受けて、革命に寄り添うあるいは革命にシンパシーを持つというサークルだったわけですね。新中国に対する関わり方、あるいは当時の時代の雰囲気というのは、どういったものだったのでしょうか？

溝口：僕が大学に入る前の年に名古屋で大須事件というのがあって、それは、帆足計と宮腰喜助という社会党の参議院議員がソ連ルートで中国へ不法入国した、その報告会に端を発した騒動でした。不法入国というのは日本の出入国管理法違反のことで、中国の法ではありません。中国の方はむしろこの二人の入国を歓迎していました。その 2 人の帰国報告会が、夜、大須球場というところで開かれた、その報告会の後、聴衆によるデモがあり、大須事件という火焰瓶事件になったのです、そのときその現場に僕は友達に誘われて行っていました。しかし一方でそういう政治運動に熱心な人たちがいるのと同時に、僕が中国語を選択したと聞くと、「おまえ麻雀屋でもやるのか」とからかう高校時代の友人もいました。時代状況は左翼の人にとっては尖鋭だったと思いますが、一方まったく無関心な人も沢山いました。そう言えば、その大須事件の夜、デモ隊から離れて、深夜、友人と家路に就いていたとき、検問に引っかかって交番に連れて行かれた。その時、若い巡査が、人が居なくなった合間に「これからの日本はどうなるのでしょうか」と真面目に聞いてきたことを思い出します。社会はまだ戦後の混沌の中にありましたね。ただ、駒場の中国研究会の部屋というのは左翼学生の根拠地になっていました。今から振り返ると、それは一種の赤色解放区というか、治外法権地区になっていて、一切の規制のない浮世離れした空間でした。それで僕も瞬く間に赤化したわけです(笑)。現実と交わらない空間だったから容易に赤化出来たのです。

伊東：そういたしますと、大学に入学する以前は、必ずしも新中国の建国に主体的に反応したというわけではなかったのですね。

溝口：ええ、無反応でした。1949年には僕は高校二年生でした。当時僕は英語の勉強のためにニューヨークタイムズをアメリカから一週間ごとにまとめて空輸で購読していました。1948年から49年にかけて、ニューヨークタイムズは中国での国共内戦を日本の新聞にはない詳しきで報道し、毎回両軍の支配地や戦線の移動などを図入りで報道していました。それをいつも読んでいたのですが、僕は一方が負けそうになるとそっちを応援するという無責任さで、将棋を眺めている野次馬のように傍観的でした。49年の10月1日にどう

報道されたかも、何も覚えていません。大須事件の夜も、わざわざ二人の議員の新中国の報告会を聞きに行って、火焰瓶事件に巻き込まれたにもかかわらずね、別に親中国も反中国も、何も感じなかったですね。だから、『日本資本主義講座』を読んだときにすごい衝撃を覚えた、あの衝撃はいったい何だったのだ、とまあ自分でも不思議なんですけど。

村田：中国語は選択外国語というか第二外国語として…

溝口：僕は、入学したのが法学部進学コースでしたから、そのコースの大多数の学生がそうであったように、ドイツ語クラスでした。ある熱心な中国語の教師から、中国語のクラスに替わらないかと誘われて自分もその気になって、教養学部の事務室に行ったら、「法学部に行く予定のものが、中国語などやったら人生失敗になる。若気の至りでそう言っているのだから、今は預かりにしておく、半年たって決心が変らなかつたら中国語に移ったらい」と言われてね。で、結局中国語のクラスに入ったのですけど。

伊東：そういうことで申しますと、むしろ先生の高校時代の教養形成というのは、どちらかというとはやはり欧米的というか西洋的なものであって、大学に入ってからいろいろな意味での転換が起きたという理解で宜しいのでしょうか？

溝口：ええ、中学・高校時代はずぶずぶの西洋文化追随者でした。ドイツとフランスの小説や哲学書、フランス映画のジャンギャバン、ルイジュウベなど、読むもの観るもの語り合うもの、どの一つとして西洋風でないものはありませんでした。細胞の全部が西欧文化の匂いを発していたと思いますよ。中国の古典とか小説とか、一切目にしておりません。それが大きな転換に遭ったのは、中国研究会で毛沢東の『文芸講話』を会読したのをきっかけにしてのことです。みんなで会読をして、革命における文学の役割とかいう問題を討論する中で趙樹理の小説、あの西洋文学に浸ってきたものの目にはどうひいき目に見ても幼稚な小説——を読みました。

趙樹理をどう読むかですが、西洋文学を基準にすれば、もともとあんなものは文学じゃないと思うのですが、しかし考えてみるとあのころ世界の6~8割くらいが発展途上国でした、当時北京から『世界文学』という雑誌が出ていましてね、発展途上国の小説や詩を紹介していました。そのなかであるエジプト人作家の作品を読んだのですよ。それは、独立戦争の時の短編小説ですけど、満員のバスにイギリスの戦闘機が機銃掃射する、それで子供が目の前で死ぬのだけでも、しかしそのそばにいた青年が空に向かって、「殺すものなら殺してみろ。おまえ達が一人殺したら俺達は十人生んでやる」と叫ぶという、そんなたわいない小説なんです。けれどもこれこそが文学なのかもしれない、とドキッとしました。僕が高校時代に読んできたロマン・ロランとかヘルマン・ヘッセのように個人の存在を追求するような作品世界とは原理が異なった、もう一つ別の世界があるのではないかと。

僕は当時「文芸講話」も読んでいて、ひょっとしたら新しい文学がここから始まるのではないかと思ったのです。近代の二重構造的性といいますか、そのころはまだ近代の問題としてとらえていなかったと思いますけど。僕は趙樹理論が卒論でしたから、ずっと文学の質の問題を引き摺っていました。駒場の時はもっぱら文学のありかたとか、政治と文学の関係とか、そういう問題にこだわっていました。

● 専門課程時代

伊東：具体的に中国文学科へ進学しようと考えられた契機というのは、やはり中国研究をなされたいということで、法学部への進学予定を変更されたわけですね。それは先ほどお聞きしました中国研究会の雰囲気ということもあるかと思いますが、そのなかで、最初は文学を志望されたというのは、何か特に期するところがあったのでしょうか。

溝口：中国文学科に進学したのは、特に中国研究や中国文学研究を志したわけではありません。当時は中国語を履修した学生というのは、中国語を生かそうとするかぎり中国文学科以外に進学できる学科はなかったのですよ。中国哲学科や東洋史学科は古い漢文訓読法で文献を読んでいましたから、中国語クラスの学生は、皆敬遠していました。これにはその頃の時代背景を説明しないと分からない。戦前の日本の外国語教育政策では、高等教育は英、仏、独語の三つのうちのいずれかの言語を学び、中国語は商業学校で学ぶのです。つまり、外国文化の摂取という面では英・仏・独語、商業用としては中国語、スペイン語でした。言い換えれば、現代中国文化は外国文化として見なされていなかった。ここで中国語というのは現代中国語のことで、中国語には古典中国語と現代中国語があった。古典中国語は江戸時代以来の漢文訓読法で読む、それは学問と認められていた、しかし現代中国語の方は、学術用語とは認められていなかった。中国の現代文学には学術性は認められていなかった。そんな状況でしたから、中国文学科に入って現代中国文学を研究対象とするということ自体が、明治以来の日本の近代教育の歪みに対する闘争の意味があったのです。竹内好の世代はその先陣になります。もっとも後から知ったことですが、僕たちの次の年に入学した学生の中には、中国語を学んで、法学部や経済学部へ進学する人たちがいたようですね。一年でずいぶん変わったんですよ。で、僕はみんながぞろぞろ中国文学科へ行くから、それにつられて進学したのです。僕にはそこしか行くところがなかったから。

村田：人民文学を選ばれたのは時代の状況だとか、周囲の状況などに押された、あるいは流されたということでしょうか。学科の中には、当然中国古典文学を学ばれた人もいるわけですよね？

溝口：僕は中文の授業はほとんど出ていないのですよね。僕がこだわっていたのは文学はどうあるのか、どうあるべきか、でした。文学集団という同人サークルを勝手につくって、

雑誌を出していました。評論を書いたり、そのときに議論していたのは文学の質の問題ですから、僕は中文のなかでそういう問題を考えたというよりは、サークルのなかで同人仲間と議論していたのですね。文学の質というのは、当時にあってはプロレタリア文学の創作理論を背景にした問題でした。僕はそういう議論の中で、むしろ創作の方に時間を割いていました。

伊東：先ほどの先生のお話にもありましたが、その頃の一般の文学青年というのは、フランス文学であるとか、だいたい西洋系の文学に傾倒する人が多かったのではないのでしょうか。むしろ、中国文学畑で小説を書こうという人は——なかには武田泰淳みたいな人もおりましたけれども——非常に少なかったのではないのでしょうか。

溝口：当時、『新日本文学』から分かれて野間宏さんたちが『人民文学』という雑誌を出して、新日本文学会から脱退しました。それにコミットしたわけではないけれども、文学の質の問題にも関わるので、僕は『人民文学』の方に心情的に荷担して、趙樹理を抱え込んでいました。当時中国では丁玲批判が始まろうとしていました。結局、政治的要請から自立しない趙樹理的な文学に先は無理、という結論に至りました。ただしそれは単純な結論ではありません。竹内好が趙樹理文学を高く評価しておりました。彼が提起していた「個の文学」に対して「集団の文学」というものの可能性、これはずっと私自身が卒論のテーマにしていたのですけれども。

村田：竹内好は溝口先生の大学在学中に論壇で活躍していたわけですが、竹内のものは結構読んだのでしょうか？趙樹理を卒論で選んだのはそういう影響がありますか？

溝口：趙樹理は自分が選びました。竹内の影響というわけではありません。竹内さんの、文学が個から全体へ転換するという図式に対して、そんなに簡単ではないだろう、と、このあたりの問題はもっと突っ込んで考えるべきであろうという不満はありましたね。そういう点で竹内批判も卒論ではやりました。

村田：魯迅には関心を持たれましたか？

溝口：ええ。卒業後魯迅研究会に参加していましたが、ちょっと雰囲気合わなかった。自分は文学青年で、会は実証主義だったので。倉石武四郎さんがそういう実証主義の人でした。最終講義を研究室でされたのですけれど、倉石さんが若い頃、北京大学に留学されたころの回顧談でした。ちょうど五四運動のさなかに北京大学におられたので、そのときの話も出てくるのですけれど、五四運動自体の話はまったく出てこない。その年に北京大学でどんな授業を受けたか、またどの先生はどの方言か、自分はそういった方言に

どう苦労しながら授業を聴講していたかということ、そういった話をされていて、それで最後の最後まで五四運動の話が出てこないのですよ。察するに五四運動というのは、当時の学生にとってほんの一部の運動でしかなかったようなんですね。だから、そのとき北京大学にいても、問題意識がなければ五四運動に気がつかなかったというのはあり得る話なのですが、気がつかなかった自分を今振り返ってどう考えるか、という話はしてもらいたかった。倉石さんは、当時中国文学史の本を書かれていて、人民の文学なんて書いておられるのでね、悩まない人だなあ、と思ったのです。後に竹内の倉石批判を読んで「いささかも空虚を感じない人」とあったので、言い得て妙だな、と思いました。そういう雰囲気は魯迅研究会にも感じていて、こっちは非常に文学センスを鋭くしている時期ですから、ちょっと違和感がありましたね。

伊東：以前にも伺ったお話ですが、こういった文学活動を行われていたというお話以外に、溝口先生は、お若い頃に、外交官あるいは貿易業を目指していたというお話を伺ったことがあるのですが、それは本当なのでしょうか？

溝口：外交官になりたいというのはまた別の文脈の話で、戦争に負けて日本はもうデンマークのように、武装無き農牧小国になるしかない、と中学生のときにそう思って、自分は牧場でも経営しようと思って、実際にニワトリを**60**何羽飼っていました。ニワトリといっても普通のニワトリではありません。イギリス種のオーピントンとかインド種のブラマとか、戦争中に絶滅に瀕していた世界各種のニワトリを集めて、種卵を有志に提供していたのです。朝それで授業に間に合わなくても先生は許してくれたりして(笑)。そういった農牧立国の文脈で、松岡（洋右）外交ではだめだ、アジア外交を日本は頑張らなくてはいけない、いう風には思っていましたので、法学部コースに入ったのはそういった外交官になるという目的だったのです。しかし、外交官は僕にとって持続する目標ではなかったですね。

伊東：それは中国との関心というものは、必ずしもつながっていない、と理解してよいのでしょうか。

溝口：アジア外交という意味で外交官を志望したとは言えます。しかし実際は大学に入ってから家業をやらされていたから、外交官試験の準備は不可能でした。

村田：では、就職活動はやらなかった…

溝口：就職活動はしたんですけどね、でも家業があるから無理だろうと思い、**32**歳まで**10**年以上家業をやりましたね。

伊東：そちらのお仕事では中国に関わるということは、特になかったのでしょうか。

溝口：いや、それはビジネスの世界だけでは精神的に満足できないですから、日中友好協会の名古屋市事務局長というのを引き受けていました。それから国際貿易促進協会とか日中貿易促進会とかにも関わり、名古屋でのそういった運動の中心にいたので、中国展を名古屋でやるというときも中心的に準備活動をやっていました。それであるとき、突然中国から代表団がやってきてホテルに呼ばれて、「毛沢東主義に従うか、武装闘争に賛成か反対か」といった踏み絵を踏まされたので、回答を拒否したら、中国展の準備委員から除名されました。中国の干渉は威丈だからで本当に無礼千万だったですよ。だから、文化大革命には、そういう角度から批判的でした。日中友好に関わってきた非常に多くの人が文革に同調し、一方で日本共産党は非常に政治的に対応していましたよね。

村田：代表団に踏み絵を踏まされるというのは、当時としては非常に特殊な、限られた中国との接触体験ですよ。

溝口：当時僕の身分というのは、中国から見ると日中友好協会の名古屋における大幹部だったのですよ。文革前に招かれて中国にも行っていますしね、友好商社にもなっていましたし、貿易も実際やっていましたしね。そのころ名古屋で文革に追随していたのはみな中国相手に商売熱心な中小企業の人たちなんですよね。それは見ていて嬉しいものではありませんでした。生活のために魂を売っている人たちの無表情な苦悩というか、作り笑いを見るのですからね。そこで僕は親文革でも反文革でもなく、中国に距離を置く立場になったんです。

村田：主に新聞雑誌などの報道以外に、中国を実際に知る上での特別な機会とか情報ルートはあったのでしょうか？

溝口：そのころから僕は大学院に入り、勉強に没頭しましたので、極端に言えば、現実の中国に何が起きているかということについては関心が無くなりました。

● 大学院時代

村田：大学院に戻られるきっかけとなったのは家業と関係があるのでしょうか？中国なるものをつかみたいという知的欲望が抑えられなくなったとか？

溝口：かっこうよく言えばそうなんですけど、実際は、家業が軌道に乗ってきたので、週に1～2回大学院に行かせてもらってもよいだろう、ということで内緒で大学院に入った

のですが、大学院が新設された初年度でしたから、学生の数が少なく、2人しかいなくて、予習をやっていないとついていけないんですね。最初の一年はこっちもいいかげんにやっていたのですが、当時の指導教官であった入矢義高先生から、「こんなことでは見放しますよ」と言われて、これが非常にこたえましてね。というのは、入矢先生の授業は面白く、東大で受けていた授業とは大違いでした。東大の授業は主体の問題を欠如させていたのです。入矢さんは主体むき出しの人なんですよね。毎時間、そういう雰囲気、自分の眼で作品を選んで、なぜこの人が自分にとって問題になるのか、自分のなかで燃えているのかわかる人で、非常に共鳴することが多かった。

村田：テキストには何を選んだのですか？

溝口：入矢先生は僕が李卓吾をやりたいと言っていたので、明末の小品文を読んでもらったんですよね。それに反応できたものですから、思い切って学問の世界に入ってみようと思いました。しかしもう30歳を過ぎていますし、友人達は早いのはもう助教授になってるし、なにせこれから始めるのですから、就職については何の成算もないので、家を一軒買って、私塾を開いて、それで生計を建てようと思っていました。子供がもう二人いましたからね。だからそういった覚悟で勉強を始めたわけなんですよ。

伊東：もともと学部の際は、趙樹理とか人民文学をやっておられたわけですが、その後、名古屋大学の大学院では、李卓吾を研究なさることになったきっかけというのを簡単にお話下さい。

溝口：本当に笑うべき話で、口頭試問の試験の時に、入矢先生から「もし合格したら何を研究したいですか？」と聞かれたときに、ふっと考えてもいなかった李卓吾という名前が出てきたのは、前の日に口頭試問の試験に備えて倉石さんの中国文学史の本を読んでいたからです。そのときに李卓吾が「童心説」というのを書いて、個性解放を叫んでいるということが書いてあったものだから、興味を引かれました。もともと大学院に入るときは、魯迅を研究するつもりでした。だけど、魯迅より面白そうだと前日に思って、口頭試問の時に「李卓吾なんかも読みたいと思います」なんて言ってしまったのです。それを入矢先生はまともに受けとめられたので、それで李卓吾を始めたのですけれど、当時既に島田虔次さんが李卓吾についての本を出しておられたなどの情報はまったく知らないでいました。入矢先生にまず何から読めばよいでしょうかと聞いたら、「李卓吾を研究するなら、まず李卓吾を読むべきでしょう」と正論を言われ、神田で『焚書』『蔵書』など計6冊を買って、まず『焚書』を第一ページから読みはじめました。読んでいくと難解な反面、行間に豊かな屈折が感覚出来て、とても面白かった。『焚書』を全部読み終わったあとに島田さんの『中国における近代思惟の挫折』を読んだら、島田さんは李卓吾を内部まで入って読ん

でない、自分の近代観に都合のいいところだけ切り貼りしているという感じを持ちました。そのときに「近代」という問題に出会ったのですね。それからドバリー（**De Bary, William Theodore**）さんが中国における **individuality** の何とかという短い文章を書いていて、李卓吾を、島田さんと同じような個我の萌芽という観点で捉えていた、それで燃えたんですよ（笑）。こっちは全訳のノートはまだ残っていますが、『焚書』を隅から隅まで読んで全訳していました。一方の島田さんの李卓吾に対する評価は、嵯文甫ら **1930** 年代の中国の研究者たちの評価と同じなんですよ。ヨーロッパの基準で明末を見るという観点、まさに島田さんはそのひとりだったのです。そうすると、個の問題をどう捉えたらよいか、という観点から趙樹理が蘇ってくるわけですよ。だからこれらは自分のなかでは連続して捉えてきた問題のつもりでした。

伊東：それで修論のテーマとして、中国的近代とか日本的近代というものは如何なるものかという問題を扱われて、李卓吾から出発して大きなテーマになった、というわけですね。

溝口：李卓吾だけではなくて、そのときにぶつかった問題は、ヨーロッパ基準というものがどのように日本の研究の中に牢固に存在しているか、という問題で、これは単に島田さん個人の問題だけではなく、日本の時代風潮の問題だと思いましたので、およそ近代と名の付く書物は、丸山真男はもちろん、竹内好もあれば、水田洋のボルケナウの翻訳など近代の問題を扱っていた人たちの論文は全部読んだんですよ。それと、福沢諭吉を全巻読んだんですね。あれは大きな財産でした。で、福沢のなかに日本の近代の原型がある。それがいろいろな形で派生しながら、日本の近代の意識を形成していると思って、それとの対比で中国を見るようになっていくと、構造の違う中国というものが見えてきました。

村田：日本の近代やヨーロッパの近代を批判的に捉え直す、あるいは主体の問題に関心をもつといったことは、ほとんど独学だったと考えてよいのでしょうか？研究会とかサークル、あるいは先生や友人との接触や会話から、自分なりの物の見方だとか研究方法などが出てくるといったことはなかったのでしょうか？

溝口：ひとりでやっていました。というのは、李卓吾を読んでいると、儒教のタームがわからないと読めないですよ。で、中国哲学の授業に出る、仏教についての議論が出るので、インド哲学の授業にも出る、そういう学科の枠を越えて出て行くというスタイルを、やむを得ず確立して、これが後に東大中国学会をつくる動機の1つになりました。学科の壁を破る、という意識ですね。

村田：戦後日本の中国研究について、これまで出てきた名前のなかでいうと、竹内好は年齢は上ですけど、同時代人だという感じを持っておられましたか？彼との個人的な接触は

ありましたか？

溝口：まったくなかった。竹内さんのものはあまりいい感じを持たなかったのですが、北京の日本学研究センターのなかに竹内主幹の雑誌『中国文学』の複印本があったので、それを読みました。その中には目加田誠さんとか倉石さんとかの文章やそれを鋭く批判した竹内の批判文などがありました。『中国文学』の竹内の文章は全集に収められているのですが、同じ文章も倉石さんや目加田さん、あるいは吉川幸次郎さんたちの文章と並べて読むと、臨場感というか緊迫感があって、竹内が雑誌『中国文学』に失望し、廃刊の辞を書くに至った動機が息苦しいほどよく分かる。文章を通して読む竹内ではなく、**1930**年代、**40**年代という時代の雰囲気の中に生きた竹内、いわば生身の竹内というものに触れたと思いました。今では竹内は僕の中で、先達であり、同志であり、親友です。孫歌さんが『竹内好という問い』という本を出版して、いま竹内ブームと言われていますが、大いにいいことだと僕は思っています。

村田：北京に行かれたのは**90**年代ですね。竹内の作品に触れてある意味、竹内好を再発見したわけですね。

溝口：つまり自分の主体への問い、というのは竹内のなかでも比較的多いモチーフで、そういう体質的な部分に共感がありました。自分の考えていることは孤独ではない、これは自分の体質として尊重していいのだということを再認識しました。それまで僕は、東大の秀才達が次々とヨーロッパの理論を消化して研究を進めていくのに劣等感を持っていましたが、自分は自分、と思えるようになりました。木山英雄君がむかし「溝口はグラウンドを1周遅れて走っているトップランナー」だと僕のことを評したけれど、これは今でも言い得て妙だな、と思っています。

● 影響を受けた人物

伊東：先ほどの村田先生の話を受け継ぐ形になりますが、竹内好を**90**年代くらいに再発見し、そして入矢先生から大変影響を受けたということだと思うのですが、他に島田虔次先生とか、むしろ批判的な、反面教師的なものも含めて、先行する中国研究者であるとか、思想史家、社会学者に影響を受けた、あるいは意識した方に、どのような人がおられますか？

溝口：日本のなかの近代の基準の問題の方に、僕は問題性を感じて彷徨っていましたが、個人個人については、特に影響を受けたとか、そういうものはありません。

伊東：例えば分野が変わりますが、丸山真男氏なども、同時代的に多大な影響があったわけ

ですが、彼の見方にも問題があったとお考えでしょうか。

溝口：丸山さんの場合も、日本政治思想史研究の基軸になっているのはヨーロッパ近代ですから、当然限界もあると思います。

村田：1960年代末から70年代にはヨーロッパ中心主義批判などは言説としてはありふれていて、むしろそちらの方が主流だったとも言えるわけです。ただそれと先生の研究歴の中で話に出てきた問題意識というのはどこかズレていて、そのズレこそが大事なのではないかと私などは思いますが、そのあたりについてはどうお考えですか？

溝口：答えになっているのかどうかわかりませんが、ヨーロッパ基準についての批判は、いろいろな形で確かに出ています。ただ問題は、それがイデオロギーの位相に留まっているという問題があると思うのですね。今度、「辛亥革命の歴史的個性」(『思想』989号、岩波書店、2006年9月)を書きましたけれど、ヨーロッパ中心主義批判が常識になっているにもかかわらず、アヘン戦争を中国近代の開幕とする見方自体は変わっていませんよね。僕にとって、それはゆゆしき問題で、アヘン戦争近代視座の再吟味は、現在形の課題です。研究の世界では依然としてヨーロッパ基準で動いている、そういう感じがしますね。

伊東：私が大学に入った当時の1980年代でも、ポストモダンとかニューアカデミズムといった潮流のなかにヨーロッパ中心主義批判も当然、含まれていたのですが、それに対する私個人の違和感というのは、アジアや日本と向き合って、そういう考えに辿り着いたのではなく、日本の学者やジャーナリストが、欧米のそれを受け売りしているだけであるという点でした。それに対して溝口先生の場合は、そういう流れとは切れたところで、期せずして同じような問題意識を持っておられたという気がするのですが、如何でしょうか。

溝口：僕は自分のことを研究職という職人だと思っていて、理論家ではないと思っています。だから自分の仕事を自分で理論付けできないけれど、職人として発見してきているものは本物であると思っています。運慶が仏像を彫るときに、中から仏像が出てくるんだという表現がありますが、僕の場合も向こうから出てきたもので、人の手で作りあげたものではないんだという自負はありますね。陳光興さんや孫歌さんなど中国や台湾の知識人の一部は、そのあたりをわかってくれているのではないかな、と思っています。

● 研究歴について

伊東：研究歴としては、大学院に進学された年齢が遅く、大変な覚悟をもって入られたと仰いましたけれども、その後は比較的順調にポストも得られて、研究職に進まれたように思われます。最初は東京大学文学部中国文学科の助手になられて、それから埼玉大学、一

橋大学を経て、東京大学文学部の中国哲学研究室に移られたわけですが、その間に若い学生と接したなかで、専門の研究や時代状況に関して、特別に印象に残ったことや問題だと思われたことはございますか？

溝口：学生の存在が僕に大きな影響を与えたというのは、東大に来てからですね。埼玉大学の時は語学教師で、中国語を教えていました。楽しい授業を心がけて、また「中国語友の会」というサークルを学生たちがつくるのを手伝って、毎年合宿をしました。いまでもその会は存続しています。最初のころに教えた学生たちはもう **50** 歳代になっていて、まだ時々集まったりしています。そんな感じで、語学教師としてはいい教師だったと思っていますのですけれども。研究ということになりますと、どういう風に影響を受けたかといえますと、東大の教師になって、例えば古藤（友子）さんの修論を読ませてもらったときにね、彼女は張之洞のことをやっていました。その論文の中で引用されている張之洞の文章を読んでいると、彼はどう見ても時代を前に進めているグループにしか見えない。であるのに当時は『勸学篇』の筆者であるとか洋務派の重鎮ということで、悪の親玉のように扱われていました。そういう評価に彼女は縛られていると感じたのですね。そのためせっかく歴史の真実に迫りながら、横道に逸れてしまっている。そこで自分が納得したくて、張之洞の全集を頭から全部読んでみたのです。それが「中国近代像は歪んでいないか」という論文の発端になったんです。東大に来るといろいろな学生がいますからね。小島毅君は宋代を研究するという目的で入ってきた、そうすればこちらも『朱子語類』を読まなくては行けない、そういう意味では、東大にいるということは、自分に対して大きな刺激になりました。

伊東：学生の指導のうえで特に注意された点などはございますか？

溝口：みんな優秀な人たちばかりで、特にそういうことを考えたことはありませんでした。

村田：東大に移られたのはたしか **1981** 年ですね。ちょうど中国の改革開放政策が始まったときで、学术交流や留学生の交換などが始まりました。そうしたポスト毛沢東時代の中国とのつきあいなどをお話いただければと思います。私の印象だと、中国哲学科のなかで、戸川（芳郎）先生が留学積極派であったのに対して、どちらかというと溝口先生は消極派のような感じでした。しかしある段階で変わられたのではないかと思いますがいかがでしょうか？

溝口：修士の段階で留学に出るか、修論を書き終えてから出るか、の意見の違いでしたね。最初は、僕は後者の考え方で、まだ自分の勉強も出来ていないのに外国へ行って何になる

んだ、という風に思っていました。しかし留学した人は、みんな中国語がペラペラになって帰ってきましたからね。これはすごいなーと思って、僕は（留学消極派から）すぐ豹変しました。

溝口：一橋大学から東大に移ったときに、東林派に関する論文（「いわゆる東林派人士の思想—前近代期における中国思想の展開（上）」『東洋文化研究所紀要』75冊、1978年3月）を書きました。この論文は東洋史の分野からはいい評価を貰いました。（先行研究で）島田さんは要するに陽明学派が明末になって東林派の復古派・保守派に遮られたという図式で書いておられたんですが、僕は島田さんの天理—人欲という、天理は封建思想、人欲は近代思想という簡単な図式では捉えられないと思っていました。で、東林派の文献から、僕の考えていたようなことがどんどん出てきましたので、東林派についての論文を一本書いたんですけど、これで腰が据わったのですね。明末清初が新しい時代の始まりなんだと、そして東林派というのは決して保守派でもなんでもない、中央に対して、地方の公論を主張するグループで、黄宗羲の直接の上流に位置するんだ、と。

それが「地方の公事は地方の手で」という「郷治」を媒介にして、「郷里空間」の充実態としての辛亥革命につながっていく、という過程が今回見えてきたのです。因みにこの「郷治」とか「郷里空間」とかいう概念は、小島毅さんたちとのある勉強会の議論の中から出てきた概念で、最近使い始めたものです。

伊東：いま確認しますと、その東林派の論文は1978年に公刊されたものですね。

溝口：僕にとっては、この論文は一つの大きな山を越えた論文でした。ただ、この論文は副題に上篇だけあって下篇がないのです。つまり下篇が書いてないのです。今回の「辛亥革命の歴史的個性」が下篇に当たるのですけれども——外国の先生は図書館を探しても、下篇が無いので、どうなっているんですかという問い合わせが今でも来ます。

伊東：先生が、単著『中国前近代思想の屈折と展開』（東京大学出版会）をまとめられたのが1980年ですが、同書には「いわゆる東林派人士の思想—前近代期における中国思想の展開（上）」が含まれていませんよね。本書に収められた「明末清初思想の屈折と展開」（『思想』636号、1977年）を書かれたのが1977年で、「『明夷待訪録』の歴史的位罫」（『一橋論叢』81巻3号、1979年）を書かれたのが1979年です。だいたい相前後して同じ時期に書かれていて、ある意味で一連の論文だと思われるのですが、単著には収められていないのは、何かお考えがあって、あるいは外在的理由があったのでしょうか？

溝口：明末までと清初以後と、人名で言えば黄宗羲までと黄宗羲以降と、そこで線を引きたかった。頭にあったのは、黄宗羲の言説がどのように清末の革命思想に連続しているか、

という問いでした。この問いは答を得るまでに二十年かかりましたね。最近の「辛亥革命の歴史的個性」という論文が、その答の概略なんですね。黄宗羲の「地方の公事は地方の手で」という「郷治」主義を媒介にして、「郷里空間」の充実態としての辛亥革命につながっていく、という過程が今回見えてきたのです。

因みにこの「郷里空間」とかいう概念は、官・紳・民が補完しあって形成される中国的な秩序空間を指し、官から自立した市民の空間である西欧の「公共領域」とは違うものとしてネーミングしたのです。また「郷治」も、自治でなくあえて郷治といったのは、それが西欧の自治と違って、官・紳・民が混淆した営みであり、かつ道徳的な自発性を動機としていることを示すためです。

村田：李卓吾の研究から始められて、特に東大に来たことによって、研究の範囲が清末に広がり、あるいは宋代まで延びていき更に天理の問題にまで広がっていく。先生のなかでは、それは必然的なモチーフの展開だったのでしょうか？

溝口：ヨーロッパ中心主義的な視座で象られた中国像というのはウソだと思っておりますから、とにかく自分で納得できるものを探したかった。特に天理論・理気論は名古屋大学で山下龍二さんの授業に出ました。当時の中国哲学の学界は理気論中心で、自分もずいぶん朱子学や陽明学を理気論でやっていました。それが二十幾年もたって、理気論というのは自明の原理ではなく、実は歴史的産物なんだということに気がついた。そこで、これまでのように始めに理気論ありきとして議論をするのは、思想史としても一つの歪曲になるのではないかという意識で書きました。それが「天理観の成立」（『東方学』86 輯、東方学会、1993 年）「中国における理気論の成立」（アジアから考える 7 『世界像の形成』東大出版会、1994 年）です。

伊東：確かに従来の研究では、理気論なら理気論のなかに入り込んで、その限りではある意味で精緻な分析をしているわけですが、それを必ずしも外在化、相対化していないという思いが致します。さて、次にそうした古代から近現代まで続く中国の思惟構造を考察するという作業を通して、先生のよく仰られている中国の非ヨーロッパ的な特質や中国の独自性に関して、ヨーロッパや日本の思想史と大枠で比較したときの特徴についてのお考えをお聞かせ願えませんでしょうか。

溝口：今回、「辛亥革命の歴史的個性」という論文を書かせてもらった後に気がついたことですけれども、例えば「自治」というものが、ヨーロッパで出てくる契機は権利闘争なんですよ。封建領主制の下、通行とか商業とかの自由がないところで、それを求めて商人層から出てくる権利闘争です。ところが中国の場合、夫馬進さんの善堂・善会の研究（夫馬進『中国善会善堂史研究』同朋舎出版、1997 年）がありますが、ああいう清代に盛行し

た一種の慈善活動、公共活動が西洋のいわゆる地方自治にあたる、これを源流まで遡っていくと、明末の功過格とか郷約運動とか一種の道德振興運動に行き当たるんですね。東林党の文章を読んだときに気がついてたことなんですけれども、郷村の郷紳たちがきそって善挙をやる——飢餓者の救済や捨て子の養育とか——そういうところから始まって、だんだん黄宗羲が主張するような地方の手による地方の公事というところまで発展していく。これが中国における自治の成り立ちです。となると、自治は道德的な動機から出てくる、と言えるでしょう。ただ道德といっても善行によって将来自分が幸せになれるという因果応報の動機を含んでいます。やがてそれが道路補修や架橋、運河の浚渫、書院、病院の設立など、公共工事や公共事業となって全国的に広がって行って、**18～19**世紀の白蓮教の反乱や太平天国の反乱を契機に、県レベルであった「郷里空間」が省レベルまでに拡大していく。そして省レベルの「郷里空間」の場で、自衛のための保甲組織が団練になり、やがてそれが軍隊になっていく。各省が政治、経済、社会、文化のどの面でも力を蓄え、やがて独立を宣言するまでになる、辛亥革命のあらすじはそんなものかと。そこにあるのは、郷村の公事は郷村の手でという郷村自治主義というべきもので、その郷村の構成は、官・紳・民が寄りあった複合空間である上、皇帝もそれを奨励している。従来の体制・反体制の二項対立とは異なるこの構図を明らかにすべきだと思っているけれども、それは僕がやるよりはむしろ村田さんあたりにやってもらいたいですよ。つまり、権利から出発するのではない、道德的な仁愛から公共活動が出てくるという図式、しかもそれが革命の主力となる、こういった構図の理論化です。

村田：今のお話に関連してうかがいますが、アカデミズムの内外で広く読まれた先生の著作に、**1989**年に出版された『方法としての中国』（東京大学出版会）があります。先ほど溝口先生は自らのことを職人であって理論家ではないという風に仰いました。けれども、いわば中国研究の骨太な方法、しかも従来の研究を鋭く批判しつつ、新しい認識の方向とか、研究者の主体性の問題とか、大きな理論的問題を提起したからこそ、この本は広く歓迎されたのではないかと、若い研究者たちにも **1990**年代以降大きな影響を与えたのではないかと、思っています。先生の中ではこうした『方法としての中国』あるいは最近出された『中国という衝撃』という、私から見ればまさに中国研究の方法論を論じている一連の著作は、どのように位置づけられるのでしょうか？職人としての研究から出てきたものなのか、あるいは先生の中でそうしたモチーフが一貫して存在していたからこそ出来た本なののでしょうか？

溝口：やはり、自分の中で主体の問題がいつもとぐろを巻いているという感じはありますね。理論家ではないし、理論には弱いのですが、主体的に中国問題を受け止めるという捉え方こそが、僕の特徴だと思っています。例えば、中国の社会主義がマルクス・レーニン主義から出ているように錯覚してきて、今でも中国国内では政治教育をしているわけです

けれども、僕が中国の歴史文献の中で見つけた社会主義はそれとは違う、むしろ宗族の相互扶助的な伝統の上いわゆる社会主義がある、それは言葉にすれば共助主義で、毛沢東はむしろそういった宗族の共助機能を国家規模に拡大したのではないか、あるいは中国には階級制は存在していないと主張して毛沢東と終生対立した梁漱溟にこそ中国の社会主義を語らせるべきではないか、いや、そもそも言われているような東側と西側のイデオロギー対抗なんてなかったのではないか、問題の軸はどこにあるのか、それは現在の中国研究のあるべき課題が何であるのかという主体への問いのなかから出てくるものだと思います。

村田：必ずしも歴史研究の理論から言うわけではないのですが、「長い近代」とか「早い近代」とかという言い方があります。中国ではまさに明末清初から現在までの **500** 年くらい——これらの見方と先生の研究視角が一致するということが、まさに木山先生の言う「一週遅れのトップランナー」ということになるのでしょうか——の時間幅になります。さらに理気論でいえば、**2000** 年のタイムスパンという連続性のなかで、先生はある種中国的なるものの研究を続けておられるわけですが、それは最初から自分のなかのモチーフとして一貫しておられたように見受けられます。勿論重点は明末から清末にあるのでしょうかけれども。そのへんの大きな、先生の骨太の核心部分はあまり変っていないんじゃないかと思うのですが、どうでしょうか。

溝口：変っていないですね。まあ、李卓吾から始めたのがラッキーでした。天理と人欲の構造についての理解が、そのころの理論では単純な二項対立だったのです。それに対して、私は、「理」観の筋道は戴震を経て孫文まで流れていると認識していたのです。当時、孫文はそういった儒教の伝統の先にあると言ったら、それを聞いた誰からも笑われるといった状況でした。まして、魯迅もそういう伝統の中にあると言った僕の話などは、誰も相手にしてくれなかった時期です。理とか儒教は封建イデオロギーという固い考え方がみな頭のインプットされていましたからね。『中国という衝撃』の最後の方で、方法論について書いたのですが、あれは職人として、若い人への期待というか、アドバイスで、とにかく素手で、既成のいかなる定見も棄てて、ただひたすら文献の中に入れてください、ということだけが言いたかった。文献の中に入るという場合、最低でも **300** 年単位で見ないと何も見えないんです。僕は『二十四史』を頭から読んで、本当によくわかりました。まだ一回半読んだだけで、三回は読まなければ、と思っています。

村田：先ほどの中国との付き合いの話に戻りますが、溝口先生が批判されたヨーロッパ基準のアジア観や近代主義への批判は、実はいまの中国においても強く意識されはじめているように感じられます。しかし、やはりアヘン戦争に始まる近代中国という見方は、イデオロギー面だけではなくて、歴史意識としてもそうとう根強いものだと思います。そうい

ったなかで、それにもかかわらず、溝口理論が大陸で広く迎えられている背景として、中国の人々が自分の歴史を振り返る際に、いままでの見方というものは、マルクス・レーニン主義だけれども、実はそのなかにはアジアを呪縛してきた近代主義的なものの見方がある。したがって、むしろそこから解放される必要がある、あるいはそれとは違う歴史の捉え方をしなくてはいけない、ということを若い世代が少しずつ意識するようになってきているのではないかと思います。そういう意識を持ち始めている若い世代との交流の中で感じたことはなにかありますか？つまり、自分は理解されているだとか、あるいは向こうから刺激を受けたとか…

溝口：僕は一貫して職人のつもりでいるので、人から理解されるか、理解されないかというのは結果ですから、結果は職人が願うことではないですね。職人という者は作品の出来映えだけが関心事で、人にどう思われるかは関心の外です。そんなことが気に掛かると作品が歪みます。たしかに最近理解者が増えつつあると感じますが、これは一種の出会いで、時の巡り合わせみたいなものと思います。

● 現代中国と日中関係について

村田：中国や日本の若い世代は、これからますます密接につきあっていかなければならないのですが、彼・彼女らへのメッセージはなにかありますか？

溝口：特にないですね。それよりも温鉄軍さんが中国は**10**年後大動乱が来ると言っているので、そちらの方を心配しています。

村田：中国では、いまの段階ではさまざまな社会矛盾を抱えながらも、いわゆる発展＝経済成長を遂げ、自意識としても「盛世」という認識をもっているようですが、そういう中国の現在の段階をどう見ていらっしゃるでしょうか？まさに明末清初以来の、社会の力の発展としてこういう形があるという認識ですか？

溝口：そうですね。（日中関係においては）むしろ問題は日本の側にあると思っています。面白いと思っているのは、安部首相が政権を保持したければ靖国神社に行けないという状況、そして従軍慰安婦も結局自分の主張を貫徹できなくて、国際的に日本の右翼が出て行こうとすれば押し戻される、これは僕らが経験したことの無い新しい状況だと思います。東アジアにおける日中の相対的な位相の転換ですね。中国が無理して張りだそうとしなくても、自然にそうになってしまう、これは東アジアの新しい力関係ですね。

伊東：しかしこうした結果は、日本政府が主体的に選んだ結果ではないというところに、むしろ根深い問題があるような気がしますが如何でしょうか。

溝口：外務省の若い人（元大使の佐藤さんと彼が連れてきたアジア課の若い人たち）と、日中知の共同体のメンバーと一緒に食事したことがあったのですけれども、ちょうどそのときに安部政権発足の時で、中国派の若い人は、ものすごく勇んで、「いよいよこれから戦略的關係が構築されるのだ」と言ってね、安部さんが思想的にどうかは関係なくて、機能として外交の一つの仕組みとして動いている、で、外務省の若手は安部首相が個人的にどう考えようとも日中関係は前進するんだと、そういう戦略的位置づけを得られたのは戦後初めてだ、とこう言うわけですね。で、中国課はすごく張り切っていますよ。宮本現駐中大使もそう思っておられると思いますよ。

村田：それは小泉政権時代に外務省が手足を縛られて、思うように外交ができなかったことへの一つの反動でしょうね。心配なのは、このような構造的な変化が起こっているにもかかわらず、日本の社会、特に若い世代にそうした底流の変動を受け止める力が弱っていて、それがナショナリズムに向かっているのかな、ということです。

溝口：僕は「辛亥革命の歴史的個性」を書いた後に思ったことですが、王朝が制度として崩壊するには、当時の中国では省の独立という形態しかないんですね。それをやったということは、あの時点で非常に大きなエネルギーを使っていると思うんですね。だからあれから混乱が生じて **38年（1911～1949）**の間、大動乱を経るわけですが、だからこそ日本は中国を侵略できた、と僕は思うのです。だから、この時期に勃興した日本の天皇制ナショナリズムは長期的な視点から見れば、東アジアの力関係の一時的な変化が生み出した異常な産物で、それは日本をアジアの優越者の地位に置いた優越的なナショナリズムです。いま辛亥革命から百年、中国は産業の面で上昇気流に乗りつつありますが、それは本来の力量からすれば当然のことです。これから五十年先の日中関係は中国優位の位相関係になるでしょう。日本のナショナリズムも中国優位を心情的に踏まえた隠微なものになるのではないか、安倍首相の「美しい国、日本」はそれを暗示していますよね。中国の今回の靖国問題についての反応も、おそらく中国自身が自分の力量に気づいていないところから出ていると思うんですね。実際のところ、中国が本来の地位を自己認識するようになれば、つまり中華大国として自認するようになれば、中国にとって靖国問題は大きい問題ではなくなるのです。今は中国の民衆も靖国問題で反応しているように見えるけれども、それは仮の姿で、明日は違うかもしれない。これからの日中関係の変化、位相の再認識、まさにそれは歴史認識問題を問うなかで出てくると思いますが、しかし現在はその歴史認識問題についても、提起される事項が細分化され、テーマも矮小化されていますよね。

伊東：それでは、中国国内のナショナリズムのようなものも、近代の辛亥革命や抗日戦争の段階から、まったく新しい段階に入ったと認識して良いのでしょうか？

溝口：そう認識していいと思います。ただしそのためには、アジアをヨーロッパの枠組みから解き放たねばなりません。具体的に言えば、アヘン戦争を近代の劃期とする区分法を解体するべきです。そしてもっと長い、最低で三百年のスペインで歴史を見直さなければなりません。

村田：知的に言えば面白い事態なのかもしれませんが、日本の問題として見ると、さっき先生の言われたように、中国に向き合う力がなくなる、という心配があります。さっき先生が指摘されたとおり、中国で省の力が強くなり、混乱している時期に日本が侵略を行った。結果的に日本は敗北したけれども、そのとき膨脹・発現した日本ナショナリズムの原型みたいなものがいまになって反復している。しかし、それが状況の変化と決定的にズレているのは、ご指摘のあったとおりです。その問題が、歴史に対する見方、まさに歴史認識問題として、あらわれている。あの十五年戦争あるいは八年の戦争でしか自分のアイデンティティを語れなくなっているところに、私はむしろ現代日本の社会的な弱さを感じます。

● 「知の共同体」の運動

伊東：先生はご研究と並行して、中国との関わりのなかでは「知の共同体」の運動、国内的には中国社会科学学会の創設ということに関わって、大変なご尽力をされたと認識しております。我々（伊東・村田）は間近にいて、比較的詳細にそうした経緯を知っているわけですが、より大きな視座からこうした先生のお仕事をどう位置づけるか、という問題もあるかと思いますが、如何でしょうか。

溝口：「知の共同体」は、もともとは「東アジア儒学会議」という目的で計画されました。それまで儒学をテーマにした国際会議は多かったのですが、それらはほぼ全てが実証的な研究発表で、主体の問題が討議された例は見当たらなかった。例えば、王陽明研究の国際会議であれば、王陽明の言行についての研究が発表される、しかし、韓国なり日本なりで、今王陽明を研究する意味は何なのか、あるいは現代という歴史空間で、東アジア三国の儒教研究者が討議すべき歴史使命は何か、という会議を成り立たせる根底としての主体の問題が討議されたことはほとんどない。そこで、その研究の主体について討論しよう、というのが僕の当初の意図でした。

ところが準備段階で集まってくる中国や韓国の報告論文を読むと、旧態依然とした、小さなテーマの実証的な論文ばかりだったので、急遽村田さんたちに呼びかけて違うのをやろうと思いました。国際交流基金のお金でやることになっていましたので、勝手に会議の名称や目的を変えるわけにはいかない。そのため本会議を補充する附属的な会議という位置づけで、東アジアにおける知のあり方を問うという名目で、名称も「知の共同」と名づ

けて、10人くらいでメンバーに呼びかけました。黒住真さん、村田雄二郎さん、渡辺浩さん、井上達夫さん、一番若いのは小島毅さんだっただと思いますけど。とにかく儒学研究に囚われないメンバーを集め、そのメンバーに見合う中国のメンバーを集めてほしいと孫歌さんに依頼し、汪暉さんを始めいいメンバーが出てきてくれることになりました。

僕はちょうどそのとき日本学研究中心の主任で北京にいたものですから、中国側の舞台裏丸見えなんですよ。まず、中国側は、いったい何をテーマで集まるのか、というところで疑問を呈してくる、そのうちに「公共領域」など当時国際的な話題になっているテーマが日本側の準備委員から送られてくる、それに対して、中国側は今、北京で日中の研究者の間で「公共領域」の問題を取りあげる意味は何か、と切り込んでくる。日本人が日本で討議するのはいいとして、それを北京まで持ってきて中国人と話し合おうとする意図は何か、と聞き返してくるのです。間に入って、孫歌さんがひとりで苦勞しているのを知っていましたが、僕は自分はロートルで、この「知の共同」会議の方は自分の出る幕ではないと思い、手を出しませんでした。

結果は失敗に終わりました。その失敗の中で、僕は主体の問題の中にこそ真に国境を越えることの問題性が潜在していると気づき、「知の共同」を続けたいと思うに至りました。そこで、国際交流基金への報告書の中に、第一年目は「失敗した」しかし玄関のベルのありがたかった、だからもう一度試させてほしい、と書いて申請したら、国際交流基金が「第一回目が失敗したから第二回目の資金を提供してくれ」と書いてくる申請は初めてだ、と言っていました(笑)。で、第二回目のときも、「玄関までは入れた、次は応接間まで入りたい」と言って、三年間資金をせびりつづけたんです。でも国際交流基金もよくお金を出してくれたと思います。資金援助は結局6年続いて、「こんな例は空前絶後ですよ」と言われました。

僕は三ヶ月以上外国に滞在するときは、その国の良知（批判的知識人）とめぐりあいたいと思って探します。台湾で、「六四」（天安門事件）の時にそういう経験をしました。台湾の清華大学の良知の人たちに出会ったのもその時のことです。北京でも一年間研究中心の主任として赴任している間に、そういった人たちにめぐりあいたいと思っていた矢先でしたから、「知の共同体」に関心を持つ人が実は中国の良知なのだ、と第一回の会議が終わってから気づくにいたって、第二回目から本腰を入れるようになったのです。

その後、後半の第四回以後には伊東貴之さんにも随分お骨折りいただきました、事務局を作らない、メンバーを固定しない、テーマを固定しない、運動として流動的でありたいと思っていましたから世話役の方は大変でした。でも、参加したみなさんは楽しめたのだと思う。知を知とする主体のあり方を問う、主体が存在するそれぞれの国の文脈を理解するなど、知の国際交流のあり方の一つのパターンをつくったと思います、台湾では陳光興さんが中心になってやってくれたし、韓国でも若い人たちがやってくれていますし、「知の共同体」の種は東アジアのあちこちで芽を出していると思います。

伊東：この運動も、当初からの大きなテーマである主体、中国研究を行う上で主体的にどう関わるかという問題の自己展開——いろいろな人を巻き込むという意味では「自己」ではないのでしょうか——なののでしょうか？

溝口：北京での第一回の集まりの時に、僕は日本側のなかでちょっと浮いていたんですよ。というのは、「知識人としての使命感」とか、当時の日本の知的風潮の中ではすでに死語化した、使うに面映ゆいとされた言葉を使ったものだから、日本側の反発がありました。日本の若い研究者にとっては、自分を知識人というのは、偉ぶった特権階層に身を置くような感じがあったんでしょうね。だから自分は知識人ではなく、庶民の一人でしかない、と言う。後で思えば、中国の伝統的な文脈では、自分が知識人でないというのは、社会や政治のありかたに対して責任を負わないと言うのと同義になる、そういう文化伝統の違いが露呈しました。だから僕が「使命感」という言葉を使って、日本側のメンバーの中で浮き上がっているのが逆に中国側に通じたんですね。中国側に溝口さんとなら交流をしてもいい、という人が出てきました。それが2年目以降、主体の問題を話し合おうという動機になって広がっていったと思うんですね。

●台湾から見た中国

伊東：「知の共同体」の動きとは直接リンクはしていませんが、台湾との関係ということで申しますと、『方法としての中国』（東京大学出版会、1989年）の後書きを書いておられたときに、ちょうど天安門事件の直前で、たまたまそのときは台湾の清華大学に滞在されていたわけですね。その折に、台湾の人たちが、中台という違いを越えて、センシティブに反応したということ、先生は好意的に書かれていたと思うのですが、そのときの思い出や、その際に考えられたことなどをお話しいただけたらと思います。

溝口：清華大学に三ヶ月いたか半年いたか記憶はあやふやなんですけど、滞在しているあいだに「六四」が起こって、テレビは毎日、北京の同胞に血を送れという、台湾全島を挙げて献血運動の大キャンペーンをやっていました。それは日本でもそういう噂が出たように、（天安門広場で）何千人かが虐殺されたという噂が既に前提になっていて、それに対して、街角に献血車が停まって、血を北京に献納するという、非常に情緒的な運動が起こっていたわけなんです。それに対して、清華大学の教職員組合は非常に冷静な対応をしていて、「民主化は我々自身の問題だ、北京だけの問題ではない」という立場で集会を行っていると出会うところに出会ったんですよ。そこで発言を求められ、日本にだって民主化の問題はある、我々はそれぞれ自分の国のなかで民主化の闘いをやってこそ他の国の民主化の運動との連帯が生じるんだと話をしたら、志を同じくする日本人だということで、それ以来、お互いの親密さが増しました。

村田：台湾から見た中国、台湾における中国研究ということで感じられたことはありますか？

溝口：僕が参照させていただいた台湾の研究の多くは、アメリカの中国研究の影響を大きく受けて、視野の広い、いい仕事をしていますね。台湾から見た中国というのは特殊ですね。まず自分たちは中華文化の中にあるとしながら、一方で台湾人としてのアイデンティティを確立しようとする点で、いわば内なる中華を他者化、相対化しています。そして欧米の研究方法で大陸中国を地球規模の視野でとらえます。私の研究は台湾の若い人たちの共鳴を得ているようですが、中国を中国内の視座でとらえるという私の方法論が共鳴されるとすれば、それは台湾では中国が他者化されているからで、中国を、親西洋であれ反西洋であれ、イデオロギーで主観的にとらえている大陸の中国人とそこが違うと思いますね。

村田：台湾としての、あるいは台湾人としての主体性、それと台湾における中国研究の意義づけなどについてはどうお考えでしょうか。

溝口：今度、陳光興（清華大学）さんの招待で台湾に行くので、そのときにでも聞いてみたいと思うんですが、台湾の教科書には、石器時代の後、すぐにオランダ統治時代になっていますが、それについては違和感がありました。というのは、以前、ある台湾の壮年の男性が、自分は三十歳なんだけど、中国の歴史は四千年、歴史から言えば自分は四千三十歳、アメリカ人など、たかだか二百幾十歳じゃないかと、アメリカ人に負けん気を出してそう言っていたことを覚えているので、そういう台湾人の中華文化意識というものを聞いてみたい。

伊東：その教科書というのは台湾史の教科書（『認識台湾』）なのではないでしょうか。要するに台湾では、中国史と台湾史という別個の科目が存在し、一方では中国文明を継承しているという意識があって、場合によっては両者（中国意識と台湾意識）がコンフリクトを起こすということではないかと思います。

村田：中国史と台湾史と世界史があって、台湾史をどう書くかということは、中国史とどう書き分けるか、という問題だと思います。

溝口：なるほど、そうですね。世界史の他に台湾史と中国史と二つあるのですか。そこで思うのは、東アジアにおける近代感覚の問題です。同じ近代化という言葉を口にしても、日本の近代化の場合は僕のように罪の意識なしには近代が語れない人種がいるのだけれど、台湾は台湾史の中では、日本の植民地時代に近代化が推進されたことを肯定的に認めている。一方韓国史の中では日本植民地下の近代化は全面的に否定されている、中国もまた違

う。つまり語感としての近代の中味がみんな違いますね。だから、ヨーロッパ文脈における近代の問題をそのまま東アジアで語るというわけにはいかないなあ、と思います。

●中国社会文化学会の創設について

伊東：さて、社会活動の一つとして、学会活動があります。先生は事実上、中国社会文化学会の産みの親の一人だと思いますが、学会形成は一面で、既存のアカデミズムや大学制度に対する批判や不満から出てきたとも思われます。そういった点について、簡単にまとめていただきたいと存じます。

溝口：学会については、大きな改革を実現したと思います。明治時代に漢学会と言っていたのが、以後支那哲文学会、中哲文学会と名称を変えながら、旧態依然たる学科単位の内窓会学会という内実はえんえんと続いていました。実は、当時は東大の文学部の学会はみな「同窓会」学会で、中哲文学会もその一つでした。会長は中国哲学科、中国文学科の主任教授が交代で当たり、全国に散らばっている卒業生に睨みを利かせているという仕組みになっていました。中哲は、四部分類の経・子部、中文は集部を研究領域としていましたが、史部だけは明治以来、東洋史学科に配分され、そのため中哲・中文は歴史観点を欠落させていました。

学会の再編を企図したとき、最も大きい障碍は東洋史との連合を実現することでした。状況をどう変えるかを考えた時、外から変えるしかないと思って、まず東洋文化研究所や駒場の中国研究関係の教員に働きかけて、学内に連合組織をつくろうと考えました。それで、つくったのが「東大中国関係教官会議」という組織で、中国からお客さんが来るようになって、みんなが連合すると都合がいいからという名目で一人一人説得しました。名簿をつくってみると東大には経済学部や法学部まで含めて四十数名の中国関係の教員がいるのですね。そこで全体で集会を開きました。それを母体に東大中国学会を、中哲文学会とは別につくるということにしたら、中哲文学会の中から反対意見が出たので、中哲文学会の総会を開いて、二票差くらいで、東大中国学会に名称替えをするということが決まって、規約を改めました。これらに四年くらいかかりました。

伊東：東大中国学会から中国社会文化学会への転換はスムーズに行われたのでしょうか？そしてジャンルを越えるということも、当初から意図されていたのでしょうか？

溝口：そうですね。だんだん広がって、東洋史の小島晋治さんを初代会長に選ぶことによって、脱東大を実現しようとなりました。小島さんも積極的に参加してくれました。今、日本には中国研究関係の全国学会は全部で四つ。最大なのは東方学会、それ以外に東洋史学会、日本中国学会、そしてわれわれの中国社会文化学会です。東方学会は中哲文、東洋史のほか、インド哲文、イスラム学などの学科、日本中国学会は中哲文学科、東洋史学会は

東洋史学科という風に、学科単位で連合した学会で、連合とはいっても、学科の壁は残したままです。それに対して中国社会科学学会は学科の壁を破って出来たという点に最大の特長があります。学科の壁を破るだけでなく、法、経の研究者まで巻き込んでいます。

村田：学会の活動の中心に、学会誌（『中国——社会と文化』）の編集と発行がありますが、ここまで大きく成長したことについて、どうお感じになりますか？

溝口：いい雑誌になっていると思います。ただ、学術論文ではない、論説的な評論があってもいいかなと思います。時代の前途を照射するような評論が無いのが物足りないと思っています。

村田：私が思いますに、学会が掲げるべき理念というのを先生はお持ちだった、ある理念をもって、古いものを変えようとしていたと思うのですが、それは一体どういった理念でしょうか。

溝口：それは単純にあらゆる分野の人たちが総合しないと、中国は研究の対象になり得ないということです。それに尽きます。学科の狭い枠を破って連合しなくてはいけない、本当はそれは手段だけど、連合すること自体が困難だったので、目的となりました。いま連合の下地は出来ましたから、これからは何をテーマにするか、主体のかかったテーマが問われるでしょう。主体のかかったテーマとは、言い換えれば現代という時代の要請をくぐったテーマということですが。

村田：いまでも（中国社会科学学会の）大会の一日目には、異分野の人を招いてシンポジウムを開くことが特徴になっていますけれども、これは**1980**年代までは異例のことだったのでしょか？

溝口：**84**年の第一回の大会では、私と浜下武志さんが報告しましたが、中哲の教員と東洋史の教員が同じ場で報告するというのは、漢学会の流れからすれば、明治以来初めてのことでした。その後、第二回は、「中国はどこへいく」という大会で、経済学部出身の高橋満さんも報告をされましたが、これは学科どころか学部の壁を破った最初の例ですね。個別の研究会などは学科の壁を破って行われていましたが、文学部の学科単位の同窓会学会は、大いに後れていましたね。助手時代にはお役目でその同窓会学会の例会に出させられましたが、参加者の視野は狭く、研究テーマも細分化され、緊張感のない仲良しクラブの学会で、アカデミズムの屍骸を見ている気分でした。それは**70**年代の終わり頃のことですが、実態は**80**年代に改革するまで続いていました。

村田：『アジアから考える』（東京大学出版会）という7巻本のシリーズも、こういった問題意識の延長線上にあったと理解してよろしいでしょうか？

溝口：そうですね。多元的な視座、分野、方法を組み合わせる場をつくるという点で共通しています。東大の中国哲学科は学科として閉鎖的で、僕が赴任したときには他学科の人（教員も学生も）が誰も訪ねて来ない、来たことも無いという状況でした。渡辺浩さん（法学部）に来てもらったり、外国の客人も来てもらったりして、現プリンストン大学のエルマンさんがその一人です。だんだん開けた雰囲気になっていったけれども、それには3～4年かかりました。そういう雰囲気があって、唐沢（靖彦）君や秦（玲子）さんのアメリカ留学組が輩出されました。いまは研究室はいろいろなひとが来て大変賑やかですね。

伊東：そろそろ纏めに入りたいのですが、いままでのお話を踏まえて、今後の中国研究のあるべき方向性とか、若い人に望む方向性などについて、何か特にお話ししておきたいこととかございますでしょうか？

溝口：特にないですね。

村田：最後にこれまでの研究を振り返って、一番楽しかったこと、苦しかったことをお話しいただければと思います。

溝口：何回か眼から鱗というか、天から光が出て自分を包んでくれたという経験をしています。第一回目が、李卓吾の後の世代、王夫之たちのなかで新しい理観、人欲肯定的な天理を見つけたこと、それから、中国における公と日本における公の違いについて、うまく説明がつかないでいたときに、日本の公は天皇か国家が公の最高位にあるのに対して、中国の公は皇帝を突き抜けた最高の位置に天の公がある、と気づいたときですね。最近では、夫馬さんの本を読んだときですね、辛亥革命の実相が獲得できたように思え、興奮しました。

村田：苦しみはありませんでしたか？

溝口：ありませんでしたね。10年間企業活動をしていたときはずっと胃の調子がよくなかったんだけど、勉強に集中したら、1ヶ月で治ってしまいましたね。

村田：野村浩一さんなどは、70年代くらいまで実際に中国大陸に行けない、実際に中国の人と話せないことが相当苦しかったと仰っていましたが。

溝口：知の共同体を共有できるような友人は、中国では**90**年代にならないと出てこなかったろうと思いますから、中国の人と交流ができないこと自体はあまり苦にはなりませんでした。

伊東：もうそろそろ時間ですし、内容もだいたい纏まったようですので、今回はこの辺で終わりにさせていただきたいと存じます。長時間にわたり、本当にどうもありがとうございました。

村田：今日は内容豊富な、貴重なお話をありがとうございました。